

第4章 「舎廬夢」調査の結果

4-1 舎廬夢ヒュッテの歴史

舎廬夢の歴史をみていくと、大きく3つの時期に分けてみることが出来る。まず、第1期は舎廬夢が成立した1979年から1988年までである。次の第2期は1989年から2000年まで。そして第3期は2000年から現在、未来にいたる時期である。

このように、3つの時期に分類する際に注目したのは、舎廬夢の取り組みの中で最も重要な取り組みの1つであると考えられる「食」についてである。この「食」が自然食へと変換したことに注目してこの3つの時期を設定した。簡単に言うと、自然食を視野に入れ始めた時期を第1期。自然食（肉を減らし魚だけにする）を実践し始めた時期を第2期。肉を無くし完全に自然食にした時期を第3期とした（図4-1）。以下にこの3つの時期別に歴史をみていく。

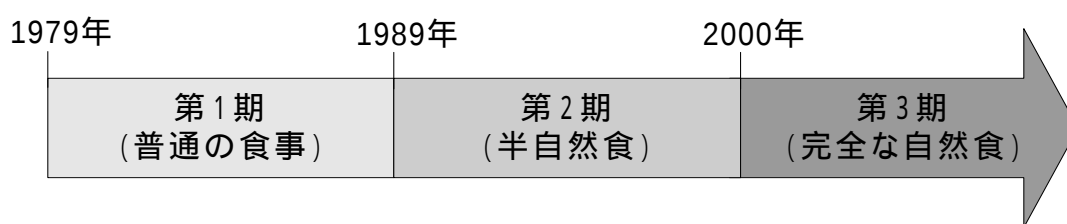


図4-1 舎廬夢の3つの時期

(1) 第1期（1979年～1988年）：萌芽期

舎廬夢の第1期では、できる限り自給自足というものを目指して取り組みながら、食事に関しては肉も魚もありのいわゆる普通のコース料理を出していた。しかし、1985年くらいから自然農などに関心をもちはじめ自然食を視野に入れ始める。

次の文は、舎廬夢が発行していた「丸太小屋のうた」という機関紙（1985年2月号）の一部である。

「何とか食べて生かされる世の中に感謝するとともに豊かな合理化された能率中心主義の分業、画一化の世の中に疑問を感じています。人間はもっとトータルに生きるべきではないのかと思います。土を耕し手近なもので道具を作り他人に全てを依存するのではなく、なるべく自立でき自然によって生かされるという事に感謝できれば、もっと豊に暮らせるのではないかとおもいますが・・・今年は、舎廬夢の将来展望を考えると共に、自然農法もやってみたいと思っています。そのうち、舎廬夢の夕食は肉の出ない玄米定食になるかもしれません。」

このことから、自分の生活を見つめなおし、現在の生活だけでなく先のことを考え、自然農・自然食に変換しようとしている事が把握できる。

次に第1期の経営や運営に注目してみる。1979年のオープン当初は、『宿泊表』という雑誌だけで、ほとんど宣伝はしていなかった。したがって、ゲストは身内や舎爐夢の会員、知り合いが大半を占めていた。また、この時期には契約保養所という形で3社ほどの会社と契約をするという取り組みも行っていった。2年目は、1年目よりは知人は少ないので必然的にゲスト数は減少していく。しかし、その年の夏に『セゾンド・ノンノ』という雑誌にとりあげられ、舎爐夢が出来るまでの歴史をドキュメンタリー風に載せてもらった。そのことにより、社会的にも認知され、さらにペンションブームという時代の流れも後押しして、ゲスト数が徐々に増え、経営が軌道に乗るようになった。以上の事から、第1期は、普通のペンションとあまり変わらないものであったと考えられる。

この第1期は、自然農などに関心を持ち始め、自然食を視野に入れはじめたということから、舎爐夢の発展につながるための萌芽の時期であったと言える。

(2) 第2期(1989年～2000年): 成長期

1985年くらいから自然農などに関心をもち始め、視野に入れていた自然食を1989年から実践し始めたのが第2期である。最初は肉を減らして菜食的な玄米食への変更から始めた。このように食を自然食に変更したのは、「みんな栄養過多で病気ではないかと。菜食の方が良いのではないか」¹⁾という考えがあったからである。しかし、最初から完全な菜食に変更するのは難しいということから、最初は肉を減らし魚だけ入れて菜食にした。

以下に菜食に変更した1989年の冬季のメニューを紹介する。

- 梅のお酒、にんじんのスープ、にじますの燻製、白菜とはこべのサラダわさびドレッシング、高きびのハンバーグきのこソース、天然酵母パン、小豆入り玄米、くわの実のアイスクリーム、紅茶 or 玄米コーヒー
- 杏のお酒、ピシソワーズ、大根のサラダ、きのこのマリネ、野沢菜のそば粉クレープ、豆腐の和風フラン、玄米ご飯、紅茶のアイスクリーム、レモングラスとミントのお茶

また、朝食のスタイルもこの時期に、バイキングスタイルに変わった。

このように、一時に全てを変化させるのではなく、徐々に変化させていることがわかる。

またこの第2期は、現在の舎爐夢の土台となる重要な期間であると同時に、様々な変化を伴った時期である。例えば、一泊二食の料金設定をやめ、ルームチャージ制に変えた。また、一週間を単位にして「シャロムエクスペリエンスウィーク(体験週間)」というのを設けて、シャロムでの生活を体験できるようにした。さらに施設面では、床暖房の補助熱源や燻製室、オープン、ベチカなどが一体になる多機能な暖炉を作成した。

以上のような取り組みから、この時期にオーナーの思想が様々な事に広がってきている事がわかる。もともと舎爐夢を建てる時から自給自足という考えをもっていた。それが「食」を変えたことにより、そこから暮らし全般に至るまで思想が首尾一貫して広がったのであ

る。つまり、最初は自給自足を理想としていた宿泊施設が、徐々に循環型の農的暮らしというものを実践している宿泊施設へと成長したのである。そしてさらには、そのことを実現するために勉強し様々な要素を取り込み、実践し、それをプログラムやワークショップという形でゲストなどに発信し始めた。

以上のように、「食」を一般的な食事から自然食に変化させたことをきっかけに舎廬夢は成長していくのである。つまり、この第 2 期は舎廬夢の成長の時期であったということがわかる。

(3) 第 3 期 (2000 年 ~) : 成熟期

第 3 期は、「食」に関しては、魚をメニューからはずし、完全に菜食にした。このことは、舎廬夢の発展・進化という問題だけでなく、時代がスローフードやマクロビオティックという流れになってきているということも後押ししていると考えられる。以下の文章は舎廬夢の部屋などに置いてあるパンフレットの 1 枚である。

【地球にやさしい食の提案】

社会が高度化し、効率、専門、分業化していく中で私たちは、なるべく自分達で作り出すナチュラルでシンプルでエコロジーな生活を心がけてきました。田舎に住み、畑を耕し、建物や家具を作り地域に溶け込んで 10 年あまりがたちました。

そんな中で食についてもより自然にかなった地球や体にやさしい食生活を考えています。世の中が便利になるにつれ、旬を感じさせない野菜や果物、化学調味料や合成保存料、インスタント食品、自然のサイクルからかけ離れた食べ物が多くなりました。食べるものは豊になったけれど、色々な病気もふえてきました。最近、健康や食事に関心のある方やグルメの方に玄米自然食の人が非常に多くなっています。健やかに旬を食べる玄米食はシンプルだけど生命力を高め、素材の甘さ、うまみを生かしたナチュラルで健康的な食事です。また、ヘルシーなダイエット食としても注目されています。ピュア - (純) で安全な地方色豊かな食事はまたとてもおいしくあるものです。(以下省略。)

このように、ただ単に食事を変えるだけでなく、なぜ自然食に変えたのか、どういう考えに基づいているのかをゲストに提示する、伝えるということを行っている。

この第 3 期は舎廬夢にとって、思想的な面を実践し、形にし発展させるという面でも成熟した時期である。それは、舎廬夢の本館の横にレストランやフェアトレードの商品を扱う雑貨屋などを含んだコミュニティを形成したのである。これは「都会とのつながりはあるが、地元とのつながりがとても少ない。」「コミュニティを皆で形成することによって何か新しいものができるのではないか。」「これからは、縦型の社会ではなく、横型のパートナー

ーシップの時代である」²⁾というオーナーの考えを反映したものになっているのである。

また、Be Good Café Azumino というイベントやパーマカルチャー塾などを始め、積極的に外に発信するということを行っている。また、この第 3 期に入ると宿に対するオーナーの考え方も少しずつ変わってきていると考えられる。第 1 期の「安らぎの場を提供し、そして皆様に自然の豊かさを十分味わっていただきたい」³⁾と言う漠然としたものとは異なり、「ゲストに舎廬夢に泊ってもらい、ここの暮らし、行き方を味わってもらいたい」⁴⁾とより具体的に考える用になっているからである。つまり 21 世紀型の持続可能な農的暮らしのデザインをゲストに提言したいということが宿の目的になっているのである。

以上のように、この第 3 期は、思想的な面を実践し、形にし発展させ、外に発信するという事や、宿に対する考え方の変化などを含めて、舎廬夢の成熟期だと言える。

4 - 1 - 1 舎廬夢の歴史のまとめ、考察

4 - 1 では舎廬夢の歴史を、「食」が一般的な食事から自然食に変換したということに注目して、3 つの時期に分けて見てきた。

第 1 期では、自給自足ということを目指しながら、あまり普通のペンションとはかわりがなかった。しかし、途中で自然農、自然食というものに関心を持ち始めたという事が特徴である。そして第 2 期では第 1 期で関心を持ち始めた自然食を、肉を減らし魚だけにするという形で始めた。そのことがきっかけとなり、舎廬夢のことが社会的にも認知されゲスト数も大幅に増加した。さらにこの自然食をきっかけとし、生活の様々な面にも持続可能性ということを実践し始めた。第 3 期では実践し始めた持続可能な取り組みというものを成熟させ、ゲストなどに発信するというレベルまでに高めた。以上のように舎廬夢は第 1 期から第 2 期、第 3 期と時期をおうごとに成長し、舎廬夢の魅力（要素）が大きくなっている。また、「完成形はないのでは」⁵⁾というオーナーの姿勢から舎廬夢はどんどん成長していくのではないだろうか。このように現在まで継続しているだけでなく、発展している要因として次のようなことが考えられる。

1 つ目に、「食」に関してだけではないが一時に全てを変化させてしまうのではなく、徐々に段階を経て変化させていったこと。

2 つ目に、自給自足や持続可能な生活を思想の核とし、様々な取り組みを行ったことである。そして、3 つ目に、思想（持続可能性）をプログラムや日常生活に反映し、その事を通じてゲストに取り組みを伝えていることがゲストにとって魅力になった事である。

ここで、舎廬夢に起こったこのような現象を人間・環境システムの視点から見てみる。末石は「周囲の環境との関わりの再認識の中で、自己の暮らしのあり方を反復的に問い直しつつ、環境にやさしい行動を積み重ねていくことが、地域環境の保全と創造に不可欠の態度であるとともに、地球規模の環境問題とわれわれの暮らしを結びつける道筋でもある」⁶⁾と述べており、このようなことを「環境社会化 (environmental socialization)」と名づけている。次に、人間・環境システムにおける環境として、近藤の言う環境イメージについて焦点を当てる。この環境イメージとは、物的環境と人間との間に存在する媒介⁷⁾であり、様々な刺激を受ける事により変容するものである。この環境社会化と環境イメージの二つの概念を合わせて考えたものが、図4 - 2である。これは、環境社会化が起こるにつれて、対象はより身近な環境イメージを形成していくというものである。このことを、実際に舎廬夢に起こったことに当てはめて考察していく。

舎廬夢のオーナーである臼井氏の「みんな栄養過多で病気ではないか。菜食の方が良いのではないか」⁸⁾、「マクロビオティックの重要性に気が付いた」⁹⁾という話からも、舎廬夢での自分たちの生活を見つめなおし、環境にやさしい暮らし、持続可能な暮らしを実践し始めたという変化が起こったことがわかる。つまり、舎廬夢では第1期の後半から「環境社会化」が起こったのである。そして、環境イメージの発達を繰り返し、徐々に身近な環境イメージを形成していく。第2期になると、形成した環境イメージを実践し始める。そして、第3期ではその取り組みの幅を広げるだけでなく、外（ゲスト）に発信するという発展を遂げたのである。

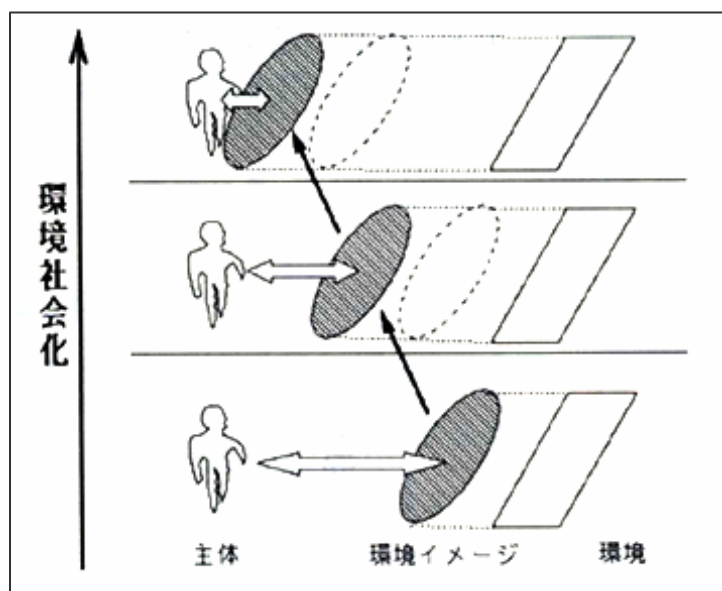


図4 - 2 環境イメージの発達過程

近藤隆二郎：環境イメージの発達過程における役割行為の意義と効果に関する基礎的研究，大阪大学大学院工学研究科博士課程学位論文，p25（1994）より

次に近藤の言う意味的参加のはしご¹⁰⁾に焦点を当てて考察する。この意味的参加のはしごとは Sherry Arnstein による住民参加のはしごを参考として作られたもので、‘はしご’をのぼるほど意味的に積極的な関与の仕方を示している。つまり、のぼるにつれて環境に対しての付き合い方がより身近になるのである。表 4 - 1 は意味的参加のはしごと舎廬夢の歴史の時期を対応させた表である。

表 4 - 1 意味的参加のはしごと舎廬夢の歴史の対応¹¹⁾

舎廬夢の歴史		
↑	意味付与・創造 意味参加・支援	創造 (innovation) 第3期
	意味宣伝 意味伝達	伝達 (communication) 第2期
	意味入手 意味享受	受容 (acceptance) 第1期

舎廬夢の第1期は、自給自足を目指していたが、取り組みとしてはあまり実行されていなかった。それが第1期の後半に食を自然食に変えるということを考え始めた。この段階は、環境イメージの「受容 (acceptance)」の段階であると考えられる。そして、第2期では、食を自然食に変え、それに伴って食以外の取り組みも行うようになった。さらに、取り組みをゲストに伝えるということをはじめた。これはまさに意味的参加の「伝達 (communication)」の段階である。第3期に入ると、ゲストに伝えるためのワークショップやプログラムが充実してくる。さらに、地元のつながりや、新しいものの創造という目的からコミュニティーを形成し、舎廬夢を発展させた。この第3期は「創造 (innovation)」の段階にあたると考える。

以上のように舎廬夢を意味的参加のはしごに当てはめて考察した。その結果、舎廬夢ではこの意味的参加のはしごを上層部までのぼっていることがわかる。このことは、舎廬夢が環境との関係をより身近なものとして認識しており、人間 - 環境システムとして成熟した段階にあると言えるのではないかと考えられる。

表 4 - 2 舎爐夢の歴史の変遷

	食	取り組み&プログラム	取り巻く状況
第1期 (1979-1988)	■ 肉も魚もありの普通のコース料理	■ 畑(有機農法) ■ 自給自足を目指す ■ 寄せ書き	■ 「るるぶ」に広告を出す ■ ペンションブームで客数増加 ■ 同類系の宿がオープン ■ 穂高町への観光客減少
第2期 (1989-1999)	■ 肉を減らし菜食的な玄米食(半自然食)	■ 自然食 ■ ヨガ ■ カントリーウォーク ■ トイレの水循環システム ■ シュタイナー勉強会 ■ ホームページ開設	■ 自然食が人気で客数・売上増大 ■ ファッション誌に取り上げられ、シーズン外の客数増加 ■ 景気低迷で観光客減少
第3期 (2000-)	■ 肉をなくし、完全な菜食(マクロビオティック)	■ マクロビオティック ■ 朝の畑の案内 ■ 地域通貨 ■ パーマカルチャー ■ ワークショップ ■ ルーフトップガーデン ■ 水系デザイン ■ 畑(自然農)	■ レストラン建設のため7、8月のみの営業(B&B営業) ■ ホームページのアクセス増加

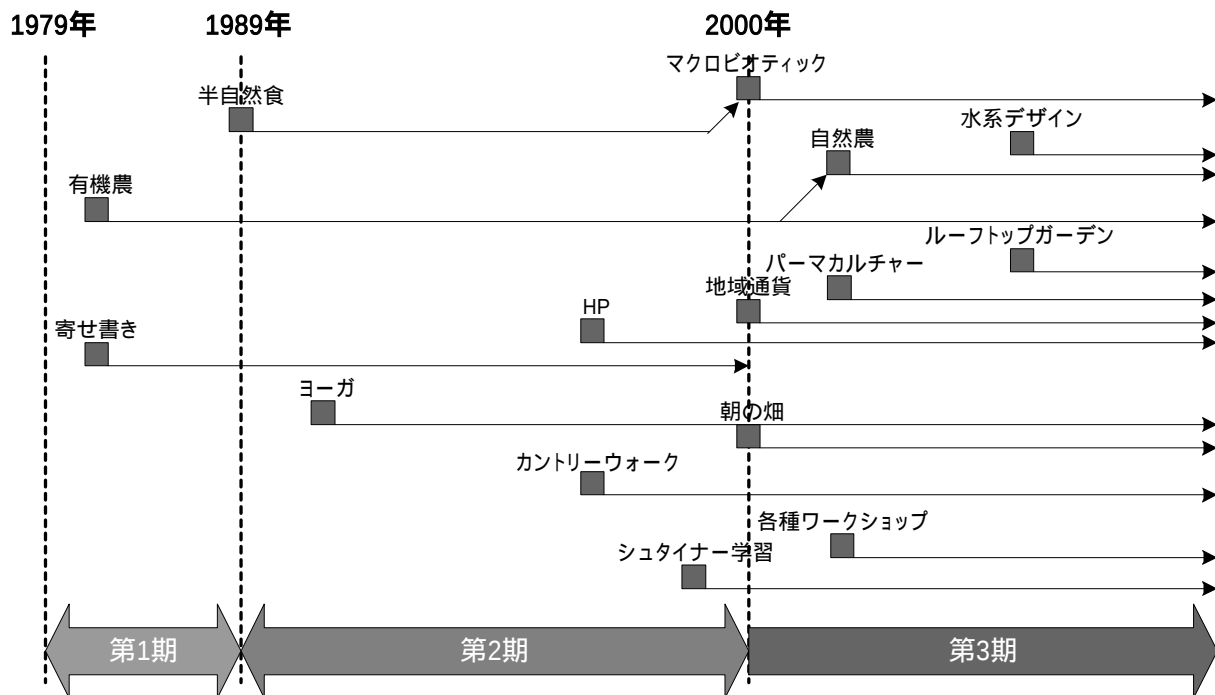


図 4 - 3 取り組み・プログラムの変遷

4-2 舎廬夢のシステムについて（第3期）

舎廬夢では日常生活の延長線上に宿泊業というものが存在している。この点は、ホテルや旅館とは大きく異なるところである。通常、そこで働く人にはホテルは仕事としての生活であり、自宅での生活とはかけ離れている。しかし、舎廬夢は舎廬夢の日常生活そのものの自体が宿泊業なのである。つまり、日常生活と宿泊業としての生活の境界線はほとんどといっていいほどないのである。したがって、舎廬夢のシステムを把握するためには、宿泊のシステムと生活のシステムの両方を把握する必要があると考える。

4-2-1 宿泊システムについて

（1） 宿泊のタイプ

舎廬夢は宿泊のタイプを、ゲストの目的やゲストのグループ構成、経済的状況に応じて選ぶことが出来る（表4-3）。以下にそのタイプを記す。

表4-3 宿泊タイプとその内容

宿泊タイプ	内容
■ 通常の宿泊	・ダブルベッドとシングルベッド×2の部屋 ・シングルツインの部屋
■ ホステラズルーム	男女別相部屋3畳に2段ベッドの部屋
■ ドミトリ	男女別カーテンに仕切られた相部屋
■ キャンプイン	テント、シュラフ持参で舎廬夢の裏の林でキャンプできる。 自炊コーナー、ランドリースペース、お風呂、シャワー、トイレなどの舎廬夢の全ての施設が使用可能
■ 車中泊	車の中で寝る。施設利用料あり

石鹸や歯ブラシなどのアメニティグッズは基本的に用意されていない。舎廬夢では使い捨ての商品は極力使われていないのである。タオルに関しては洗面所に1部屋1枚使用できるように置いてある。



写真4-1 トイレにおいてある部屋別のタオル

(2) 基本的なプログラム

基本的な舎爐夢でのプログラムの流れを以下に記す。

■ チェックイン (PM3:00~)



写真4-2 舎爐夢&コミュニティー

■ 夕食 (PM6:00~7:00)

旬を食する穀類菜食玄米自然食のコース料理。アトピー除去食など対応可である。この食事の最中にオーナーが次のようにアナウンスする「食べきれなかったり、食べれないものはこの皿に入れてください。隣のテーブルの人が食べます。それでも残ったら私が食べます。みんなが平和に暮らせます！」。このことにより、食べ残しがほとんどないのである。





写真 4 - 3 自然食のコース料理（ディナー）

上の写真の献立（野菜のスープ、きのこ・ワカメ・えのき・ラデッシュの和え物、ひよこまめのハンバーグ、玄米、おからのコロッケ、りんごのタルト・大豆のクリーム・玄米コーヒー）これらは全て、この季節に取れる無農薬、有機栽培の物を使用。味付けは昆布と干しいたけのだしで、白砂糖、添加物、化学調味料は使っていない。日本古来の素材を使用し、体にやさしい食事を作っている。

■ スライドによる安曇野案内（PM8：30～）

この時間が舎爐夢のメインタイムとして位置付けられている。オーナーがスライドを交えながら安曇野の案内と 21 世紀のあり方を語るのである。この参加は自由である。

また、このスライドでの案内のあとに、一人ずつ簡単に自己紹介を行う。そこで、他のゲストがどのようなことをしていて、どのようなことに興味を持っているのか、なぜ舎爐夢に来たのかなどを把握することができる。自己紹介のあとは、野草茶を出してくれ、それぞれ他のゲストと会話をしたり情報交換したり、オーナーの話を聞いたりコミュニケーションを取ることが出来る時間である。これは、オーナーが人と人のつながりというものを重要視しているからであり、そのための機会を提供してくれているのである。このようなことは普通の宿泊施設とは大きく異なる点であり、舎爐夢の魅力の 1 つである。



写真 4 - 4 スライドを使った安曇野案内の様様

■ 朝の畑案内（AM6：00～）

福岡農法・川口農法・MOA 自然農法・有機農法・パーマカルチャーの圃場の見学を行う。
農の世界から社会経済を語る。自給可能な農的暮らしのデザインに触れることが出来る



写真4 - 5 オーナーの説明の模様



写真4 - 6 パーマカルチャーガーデン

■ ヨーガと瞑想（AM6：45～7：30）：

■ 朝ごはん（8：00～8：30）

バイキング形式である。施設の様々なところで食事が出来るようになっている。したがって、外で食べることも、テラスで食べることも可能であり、ゲストの趣向や気分に合わせてる事ができる。



写真4 - 7 パンや野菜などを自分で盛り付ける朝食

舎廬夢の基本的なプログラムは以上のような流れになっている。しかし、これはあくまで基本的なプログラムの流れである。「スライドによる安曇野の案内」や「朝の畑」などのプログラムに参加したくなければしなくてもかまわない（ご飯に関しては時間が決められている）。また、舎廬夢では自然農やヨガ、シュタイナー学習などのワークショップ（毎日行っているわけではない）を行っているので、そのようなことを自分のプログラムに組み込むことによって何パターンも違った舎廬夢を体験できるのである（図4 - 4）。

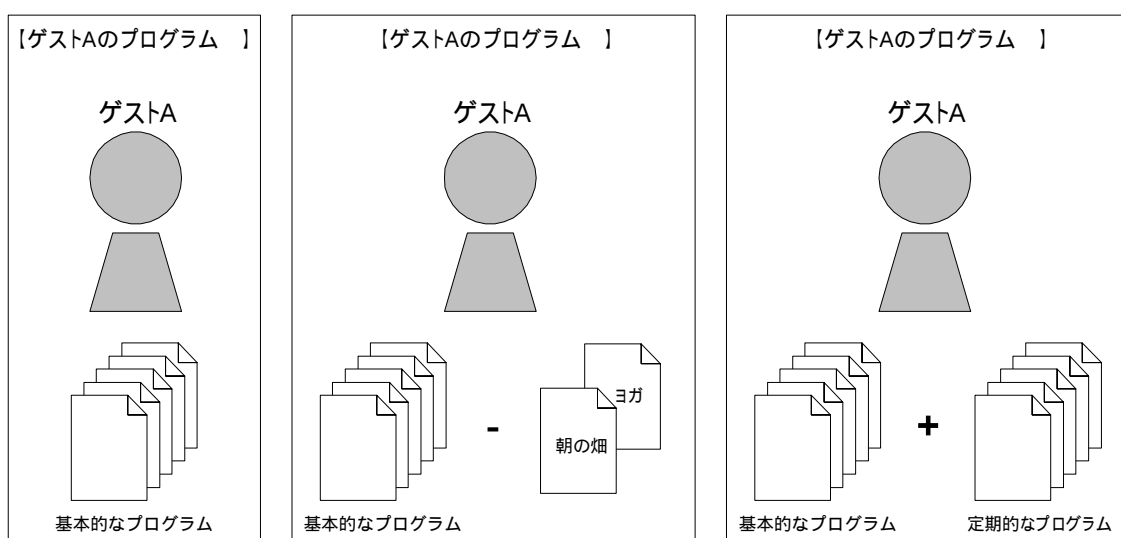


図4 - 4 ゲストAのプログラムの組み合わせ例

舎廬夢のスタイルとしては、基本的に押し付けがましい事はしない。ゲストに様々なきっかけを提供するのみである。しかし、ゲストがもし興味を持っていれば、それに関するビデオを見せてくれたり、話をしてくれるのである。

つまり舎廬夢の宿泊システムは、あくまでも、ゲストに舎廬夢の生活に興味・関心を抱いてもらうためのシステムであり、ゲストの目的や気分にあわせることができる柔軟なシステムになっているのである。

(3) 舎廬夢での規則

次に、宿泊した際の規則について説明する。舎廬夢では基本的に規則はない、しいて言えば全館禁煙と施設の消灯が 11 時というくらいである。基本的には何をしても自由である。それは、人と人の結びつきや、信頼関係というものを重要視しており、ゲストを信頼するという事に基いているからである。その事は、次にあげる事例に顕著に表れている。

舎廬夢の中にはワインやビールなどの飲み物やスナック(自然食品や無添加の食品)が販売されている。しかし、誰が見張っているわけでもセンサーがおいてあるわけでもない。ただ単に冷蔵庫が置いてあり、その上にお金(支払ったお金)を入れるためのピンが置いてあるだけなのである(右の写真)。筆者も実際に利用してみたが、冷蔵庫のピンの中にはお金がいっぱい入っていた。取ろうと思えばいつでも取れる状態である。

以上の事からも、舎廬夢では自由と信頼に基いたシステムが成立しているという事がいえる。



写真 4 - 8 舎廬夢の無人売店

(4) コミュニティー

舎廬夢は 2000 年にこれまで実践してきた、自然と共生する農的な暮らしをさらに発展するために、オーガニックレストラン&カフェ、フェアトレード雑貨や書籍、八百屋、自然食品などを扱うショップなど兼ね備えた「舎廬夢コミュニティ」を立ち上げた。それは「2000 年までに宿というものをやっ



写真 4 - 9 舎廬夢コミュニティ

てきて都会とのつながりはあるのだが、地元とのつながりがすごく少ない。レストランや共同体を皆でやる事によって、何か新しいものが出来るのではないか。社会は分断させ競争させる、それが資本主義の仕組みでそれなりに豊になったが個と個のつながりが薄くなっている。そのつながりを全て自分の中で持ちつつ、小さな世界の中で自給自足的な循環のある暮らしをしてみたい。」¹²⁾という思いがあったからである。

シャンテバザール

オーガニックコットン、麻、シルクなどの天然素材で手作りの衣類やフェアトレードの雑貨などがある。また、シュタイナー思想に基づいた木のおもちゃやみつろう粘土やクレヨン。草木染めフェルトや指人形型、羊毛など手作りのための材料もそろっている。また、中にあるミニ書店ではエコロジー・環境・食・子育て・教育・精神世界など次の時代へのヒントになる本などがそろっている。



写真 4 - 10 シャンテバザールの中の様子

ファーマーズ（八百屋・自然食の店）

信州産のものを優先的に扱っている。野菜はできるだけ地元の安全なものを提供している。委託販売も行っている。また、自然食品も販売している。今後は、ただ野菜を売るのではなく実際に舎廬夢の畑で獲ってもらうということも、計画中である。



写真 4 - 1 1 ファーマーズの様子

地域通貨（安曇野ハートマネー）

このコミュニティでは、地域通貨、安曇野ハートマネーというものを使用する事が出来る。これは、地域通貨をつうじて、人と人のつながりを作れるのではないかと考えから始められた。

自然育児 森の子

2002 年から始まった、園舎を持たない保育の場で、シュタイナー理論に基づいた自然誘導型縦割り保育を行っている。四季を通じて、雑木林や野道を歩いたり、外でお弁当を食べたりと、野外での活動がほとんどである。また、保育士任せにしない「自主保育」という形で、保護者も保育に出るだけ参加している。

このような活動を通して、親も子も一緒に育っていくような園である事を目指している。



写真 4 - 1 2 保育の様子

4-2-2 生活システム（第3期）

次に第3期の舎爐夢の生活システムについてみていく。

（1）施設・設備について

舎爐夢は三年間かけて作ったセルフビルドの建物である。そして、建て始める段階から設備面などを削らず間に合わせではなく本物を目指した。部屋は全面床暖房、壁は漆喰、大きな暖炉も装備している。その他に新建材も使っていない。エネルギーの点でしていることは、二重のペアガラスを用いている事と、温室があって温室の昼間の暖かい空気を循環させて蓄熱したものを夜にだす。そういう試みを行っている。



写真4 - 13 共有フロア - にある暖炉

最終的には、自家発電をしたいと考えている。しかし、基本的には「そんな暖房するより、服一つ着ればいいんだよ。うち九時になるとみんな切れちゃう。そういう風にしてある」¹³⁾と臼井さんは言う。

以上のような事は、舎爐夢を建てる段階から環境にやさしい、循環のある暮らしという事を念頭に入れていた結果である。

（2）環境配慮について

シャロムでは建物から家具や小物までほとんどが自家製である。また、使い捨てでない循環のあるエコロジカルな生活を目指しているので様々なところで工夫している。地球のためにできること一つずつを合言葉に、様々なエコロジー活動を進めている。1回きりで捨てる備品を部屋にはおかず、簡便さだけでない視点でのエコロジカルな使用を目指している。

【紙について】

リサイクル用封筒用紙・リサイクル便せん

毎日たくさん来る手紙の封筒をリサイクルしている。

リサイクルボックス

ホールにリサイクルボックスがあり、「いらない物で有用な物はリサイクルボックスへ、必要な方はお持ち下さい」と表示してある。少しでもゴミにならず、新たな命が与えられる工夫をしている。

サニタニーバック

新聞の広告で袋を作りサニタニーバックにしている。使う方も気持ちよく、処理も便利と言う点から実践している。右の写真は実際にトイレに置いてあるものである。



写真4 - 14 サニタニーバック

【食について】

エコロジーパン（玄米おかゆパン）

野菜の残りや、玄米の残りをおかゆにしてパンを作っている。

預け鉢

食事の時にテーブルにおき、「預け鉢 食べられない物はあらかじめ預け鉢へ、食べられる人は取って食べましょう。テーブルで処理できなかったら隣のテーブルにお持ちします。みんなが平和に暮らせます。」と一声かける。この工夫により、毎日ほとんど食べ残しがでない。

残飯処理

ほとんど残飯はでないが、コンポストに入れて畑で使われる。また犬やアヒル鶏のえさとしても生まれ変わる。

廃油・てんぷらの油のリサイクル

油は漉してディーゼルエンジン、トラクターの燃料として使っている。3分の1以上入れなければ燃料として充分使える。

【水について】

トイレの水循環システム

合併浄化槽を浄化槽の後ろに2個付けてE M菌を使いトイレ水の循環をしている。したがって、中水道により水の使用量をかなり減らすことができる。また、このようなシステムをただ使用しているだけでなく、そのようなシステムになっており環境に良いということをゲストにもわかるように説明書きが置いてある。

コミュニティーにあるレストランでは、コンポストトイレが用いられている。そこにも、しっかりと説明書きがされていて、使用するゲストにわかるようにしている。



写真4 - 15 トイレ&説明書き

雨だれの水

雨だれを受ける樽として、ウイスキーの樽をリサイクルしている。花の水はこの水を使用している。また中水道としてトイレの水循環にも使用される。

【その他について】

- スリッパは何度も洗って使える素材で出来ている
- ごみ箱のごみ袋にもビニールは使用せずに、新聞紙で袋にしている



写真4 - 16 舎廬夢の備品

- タオル・歯ブラシ・石鹸：洗濯に石鹸を使わない。洗髪にシャンプーを使わない。風呂でも石鹸を使わない。食器洗いも洗剤を使わない。洗濯も塩と木炭を用いて行う。
- ワインの空きビンや樽は棚において再利用を進めている。お茶を入れるのに使用したり、おいしい安曇野の水をお土産にするのにも使用している。また、缶ジュース缶ビールの類は置かないことにしている。

以上のように小さいことから大きい事まで舎廬夢では少しでも環境に負荷を与えない事を考え、それを実践している。それは施設を建てる段階から考えているので、全ての要素が首尾一貫している。

(3) 農業

舎廬夢では 2 反の畑と田んぼを自給自足のためにおこなっている。それは、自らの畑で採れた野菜を食卓に出し、残飯は畑に返し肥料にするというような循環のある暮らしを実践するためである。具体的に農法として有機農法と自然農（耕さず、無農薬、無肥料、草や虫を敵とせず共生する自然の理に沿った農である）パーマカルチャーの畑を行っている。



写真 4 - 17 耕さない舎廬夢の畑

臼井さんは次のように語る「60点でいいんじゃないですか。自然農法は60%しかとれないですよ。それでいいんです。その代わり健康

的な汗もかけますし田畑は気持ちがいい。何にでも完璧を求めるから社会がおかしくなるんです。化学肥料を使って無理やり育てて、全て収穫しないと気が済まない。(以下省略)」
¹⁴⁾ このように、全てを取ってしまうのではなく、取れる分だけ取る。その事によって、自然の力を最大限に生かすことが出来るのである。

また、臼井さんは次のような事も言っている。「百姓もいいけど、それだけじゃあいけないと思う。百一姓がいいと思う。一とは何か秀でた事をやる。百姓は農的なベース、そしてもう一つ何かがある。ここの場合は宿という形で一姓をやっている。そうすると、全体的に地域と経済的なものも解決しつつ、自給自足的なものもできていく。新しい生き方が出来るのではないか」¹⁵⁾。このことからわかるように、農業は舎廬夢にとって生活の中心であり、ベースであり、舎廬夢の思想を反映するそのものである。

4-3 舎廬夢のプログラム

4-2-1(2)で舎廬夢の基本的なプログラムについては説明した。ここでは、基本的なプログラム以外にどのようなプログラムがあるのかに注目する。注目する際には、4-1-1で分けた3つの時期(第1期・第2期・第3期)ごとにみていく。

また、ここでいうプログラムとは、舎廬夢で行われる行事やイベント、ワークショップというものも含めたものである。

4-3-1 プログラムの変遷(第1期・第2期・第3期)

プログラムの変遷を見ていく事は、舎廬夢の歴史や取り組みを見ていくことになると思う。4-1-1でも述べたが第1期の舎廬夢は、自給自足というものを念頭におきながら取り組みはしていたものの具体的にはあまり実践されていなかった。つまり、漠然とした方向性はあったもののそれをしっかり実践するレベルには至っていなかったのである。第1期のプログラムは以下のような事が行われていた。

(丸太小屋のうた 増刊号より)

- 6月下旬：初心者向け登山教室
- 8月中旬：盆踊り大会・花火大会
- 9月下旬：初心者向け登山教室
- 11月上旬：マラソン大会
- 12月24日：クリスマスパーティー
- 12月31日：年越しパーティー
- 1月1日：もちつき大会
- 2月下旬：居候大会
- 3月下旬：冬山入門登山教室

このプログラムを見ると、「初心者向け登山教室」というオーナーの趣味・特技を反映させているプログラム以外は、普通の宿泊施設のプログラムとあまり変わりのないものである。このことから、第1期では舎廬夢の生活や考えを体験したり伝えたりするようなプログラムは存在していないという事がわかる。

第2期には、「食」を自然食に変えることをきっかけに様々な取り組みを実践し始めた。その事によって、舎廬夢のプログラム自体も変わっている。例えば、

- 朝のヨガと瞑想

をやるという事を4-2-1(2)の基本的なプログラムに取り入れる

- カントリーウォーク
- シュタイナーの勉強会

のようなイベントやワークショップを定期的なプログラムとして始める。

以上のようなプログラムは舎爐夢が目指している方向性に、有機的につながっている。

このことから、第2期のプログラムは、舎爐夢の目指している方向性を様々な角度から提示して、コンセプトを伝えるという目的が明確になっていることがわかる。

第3期に入ると、舎爐夢コミュニティーの立ち上げを始めとして、第2期のよりも増してさまざまな事を実践し始めた。それに伴って、プログラムもさらに充実したものになったのである。例えば

■ 朝の畑の案内

が基本的なプログラムに加わった。また、

■ 安曇野自然農学習会

■ カントリーウォーク

■ ポタリング

■ Be Good Café Azumino (表4-4)

などが定期的なプログラムに加わり、時期によってコンサートを開いたり、写真展を開いたりというような一時的なプログラムも行われている。

以上のことから、舎爐夢のプログラムは基本的なプログラム、定期的なプログラム、一時的なプログラムの3つから構成されているということが把握できる(図4-5)。

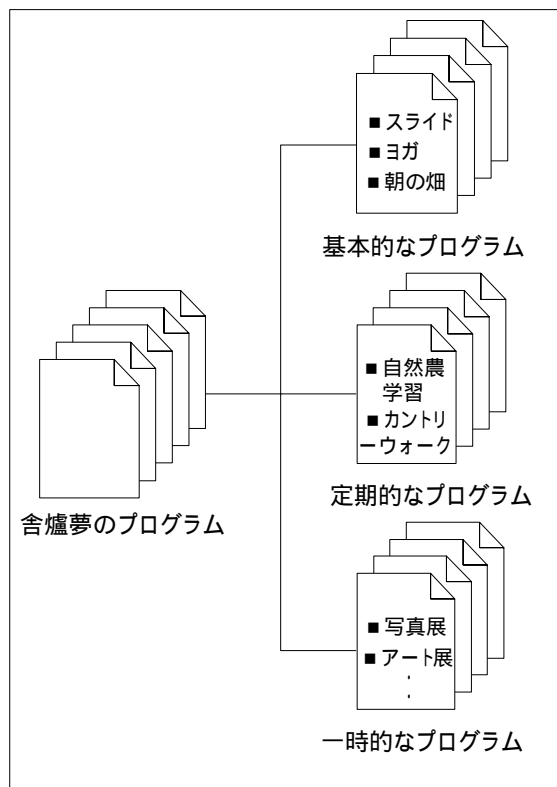


図4-5 舎爐夢のプログラム構造図(第3期)

表4-4 舎爐夢のプログラム(2003年度)

定期的プログラム	内容	日時・会費(2003年度)
■ 安曇野自然農学習	自然農実践者を迎えての学習会	年6回、年会費2000円 / 単発参加500円
■ 安曇野シュタイナー学習会	シュタイナーの思想、理論を学び、体験、実践しながらお互いに意見交換を行う。神秘学概論など。	第4火曜日、1回500円
■ カントリーウォーク	何も無い、誰もいない野道・山道・峠道を歩く、そこに村人の息遣いを感じながら心を開放する喜びを味わう小さな旅	5/18、6/15、9/2、10/19の第3日曜 年会費1500円 / 単発参加500円
■ ポタリング (自転車による散歩)	安曇野を自転車を使って散歩する。	5/11、6/8、7/13、9/15、10/13 年会費2000円 / 単発参加500円
■ Be Good Cfe Azumino	パーマカルチャーの実験農園作り。循環型社会モデル、豊かな社会へのキーワードを学習する	3/29、30、5/31、1、8/30、31、10/25、26 参加費6000円

4-4 「舎廬夢」調査の結果のまとめ、考察

第4章では、舎廬夢の歴史、舎廬夢のシステム、舎廬夢のプログラムに焦点をあてて、舎廬夢とはどのような施設なのかを明らかにしてきた。以下にこの3つについて簡単にまとめる。

まず、舎廬夢の歴史については、「食」に注目して考察した。そして舎廬夢の食事が普通の食事の時期、肉類を少なくした自然食にした時期、肉類をなくし完全に菜食のみの自然食にした時期と言うように3つの時期に分ける事が出来た。その結果、舎廬夢は建設当初から自給自足の持続可能な生活を目指していたが、「食」を自然食に変えた事をきっかけに様々なことを実践し始めているという事を把握した。このように、舎廬夢では第1期、第2期、第3期と時期を経るに伴って、舎廬夢の魅力を増幅させていったのである。

次に舎廬夢のシステムについて考察した。舎廬夢はホテルや旅館とは異なり、ホストの生活とゲストの生活に明確に境界というものがあまりみられない。つまり、舎廬夢の宿泊施設としてのシステムとホストの日常生活のシステムが混在しているのである。したがって、この二つのシステムをあわせてみるのが舎廬夢のシステムだということができる。

舎廬夢のシステムの特徴は、大きく3つある。まず1つは、宿泊のタイプが1種類出ない事である。このことによって、ゲストのメンバー構成や経済的理由に関わらず宿泊することができる。2つ目は、基本的なプログラムと言うものはあるものの、自由参加であり、ゲストの目的や気分によって自由にプログラムを組む事が出来る柔軟性が存在している事である。3つ目としては、最低限の規則はあるものの基本的には自由であり、ゲストを信頼する事に基づいている事である。

最後に舎廬夢のプログラムについて考察した。ここでは、舎廬夢の歴史で分類した3つの時期ごとにみて、プログラムの変遷に注目した。その結果、プログラムは舎廬夢の歴史に大きく相関しており、「食」を自然食に変えて様々なことを実践していくにつれて、取り組みをプログラムとして反映している事がわかった。つまり、第1期では普通の施設と変わらないようなプログラムであったのが、第2期を境にして舎廬夢のコンセプトを体験できるようなプログラムへと変わっていったのである。そして、第3期にはより充実したプログラムが行われるようになったのである。

以上の事を総合して舎廬夢の特徴を抽出する。

舎廬夢では、1つの施設のみで様々な魅力を持っている。つまり、多様性(Diversity)を成立させている。

ゲスト別に対応できる、自由で柔軟なシステムを確立させている

施設の設備から様々な取り組み、プログラムに至るまで、舎廬夢の思想を核として、様々な要素が有機的に結びついている

次に第2章で取り上げた宿泊施設における環境配慮の領域に焦点を当てて、舎廬夢の要素の変遷について考察する。

図4-6は、舎廬夢の第1期の要素を、宿泊施設における環境配慮の4領域に舎廬夢の要素を当てはめたものである。図4-6をみればわかるように、第1期では4領域の大半が取り組まれていない。ハード・ホストの領域とソフト・ホストの領域の取り組みに関して、わずかに行われているだけである。つまり、第1期では、自給自足を目指していたが、具体的な取り組みは実行されていなかった。

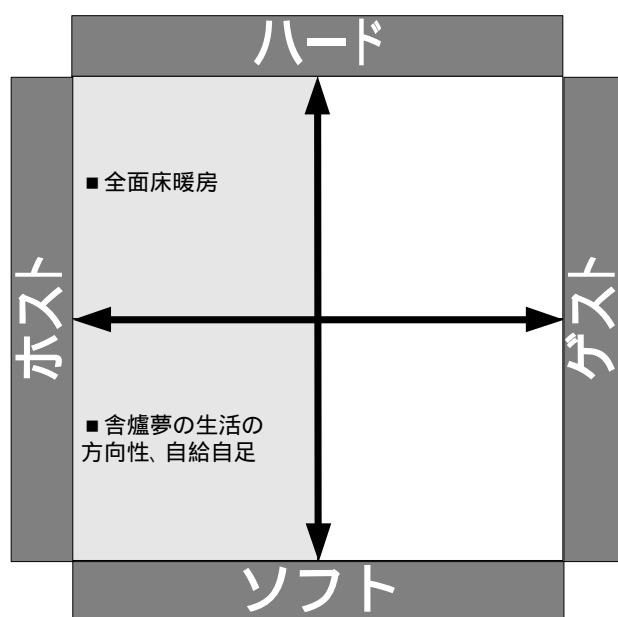


図4-6 舎廬夢における環境配慮の領域（第1期）

図4-7（図中の○の取り組みは、以前から取り組んでいたもの。■の取り組みは、新しい取り組み）は、図4-6同様に、第2期の要素を当てはめたものである。これを見ると、第1期の取り組みとは異なり、4領域全てにおいて取り組みがなされていることがわかる。このことから、食事を半自然食にする事に伴って、自分たちの生活自身も見つめなおし、環境に配慮した取り組みを行うようになっている事がわかる。特に、ハード・ゲストの領域、ソフト・ゲストの領域というゲスト側の取り組みが大幅に増加していることがわかる。

これは、舎廬夢で取り組んでいる環境配慮の取り組みやエコロジカルなライフスタイルを、外（ゲストなど）に発信しようという意図が読み取れる。また、外に発信すると言う事を行うことに伴って、プログラムも増加していることがわかる。

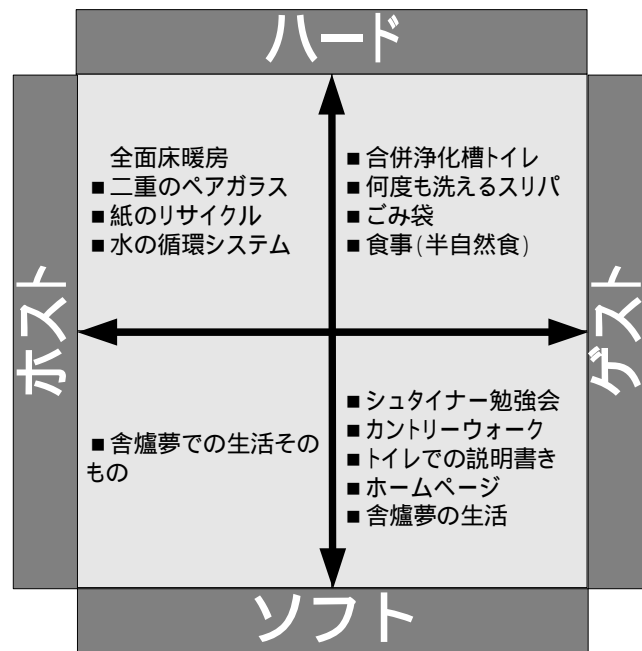
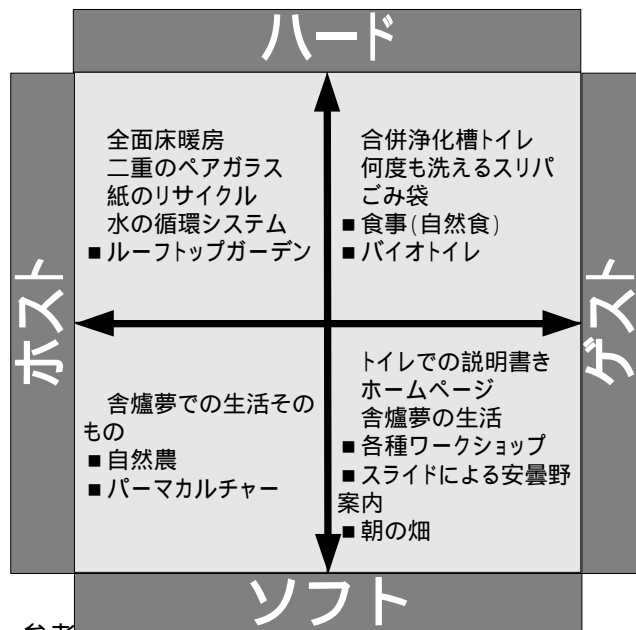


図4 - 7 舎廬夢における環境配慮の領域（第2期）

第3期になると、第2期にも増して取り組みの幅が広がっている。しかも、特定の領域の取り組みだけを行うのではなく、4領域全ての領域において取り組みが広がっている事がわかる。これは、第1期では、宿やゲストに対する考えが漠然としていた事とは異なり、舎廬夢の暮らしを味わって欲しいと、より具体的な考えになったからと考える。つまり 21世紀型の持続可能な農的暮らしのデザインをゲストに提言したいということが宿の明確な目的になった事により、より積極的に様々な事に取り組み始めたと考えられる。



第4章 註及び引用・参考文献

図4 - 8 舎廬夢における環境配慮の領域（第3期）

- 1) 臼井健二, 2003-11-17, 私信
- 2) 同上
- 3) 同上
- 4) 同上
- 5) 同上
- 6) 末石富太郎+環境計画研究会:環境計画論 - 環境資源の開発・保全の基礎として - ,p197 ,
森北出版株式会社 (1993)
- 7) 近藤隆二郎: 環境イメージの発達過程における役割行為の意義と効果に関する基
礎的研究, 大阪大学大学院工学研究科博士課程学位論文, p19 (1994)
- 8) 臼井健二, 2003-11-17, 私信
- 9) 同上
- 10) 近藤隆二郎: 前掲書, p25, 1994
- 11) 近藤隆二郎: 前掲書, p26, 1994 を参考に筆者が舎廬夢の歴史を追加して作成
- 12) 臼井健二, 2003-11-17, 私信
- 13) 同上
- 14) 門辺貴至: 全てを循環させる人 - 長野県穂高町・臼井さんの暮らし - ,自休自足 Vol.2 ,
(株) 第一プロGRESS, p38 - 39
- 15) 臼井健二, 2003-11-17, 私信